

新世紀ミュージアム

米国南西部先住民ズニは、自身の文化を復興し継承していくため、ニューメキシコ州に自ら博物館を設立し運営している。自治政府 (Zuni Tribe) の登録数だけでも約二万二〇〇〇人にのぼるズニのひと。彼らの文化のよりどころとなる博物館の活動を紹介する。

米国先住民コミュニティと先住民資料を所蔵する博物館との関係は、一九九〇年制定の「米国先住民墓地保護・返還法 (NAGPRA)」の法整備や、先住民が運営するトライブ博物館の出現により、この数十年あまりで劇的に変化してきた。およそ二十年前に文化人類学者のジェイムズ・クリフオードが先駆的に述べたように、旧植民地支配国の収集者や収蔵機関の所有物だと自明視されてきたモノが、先住民自身が運営する博物館の要請によって返還されたり非公開にされたりしている。

文化復興のための博物館

アシウィ・アワン博物館・遺産センター (通称ズニ博物館) は、一九九二年にズニ成員が運営するNPO組織として保留地内に設立されたトライブ博物館である。博物館機能には、収集、

保存・管理、研究、展示、資料を活用したワークショップといった来館者サービス活動などがある。これらに対してトライブ博物館に顕著な特徴は自文化表象である。この場合、情報を利用し、展示を見るのは、ズニのコミュニティの成員である。そのあらかのひとつだろうか、ミュージアムショップは併設されておらず、ズニの文化を消費するような土産物の販売はおこなっていない。彼らが注力するのは、現在では廃れてしまった伝統的農作業や美術工芸品制作の復興だったり、ズニのコミュニティにとって歴史・宗教・言語的に重要な出来事や地名を地図上に描き加える「アート地図計画」だったりする。博物館のミッションは、ズニのコミュニティ成員のための文化活動の実施および支援、そして対外的な交渉なのである。

展示および博物館活動

決して広くはない館内には、人骨収奪の様子の再現展示や、ズニを調査した民族学者・人類学者の肖像画やフィールドノート、ズニのクラン (氏族) 神話に基づく移住史やアート地図などが展示されている。一方で、ココとよばれる超自然的存在を象った木彫人形やその仮面などの特定の儀礼具は収蔵庫に納められており、展示されていない。本博物館がこの十年で主と



ズニ博物館外観 (2010年)



ズニ博物館内で展示中のアート地図で描かれた絵画。ズニ保留地周辺の地図上に、ズニの神話の登場人物が描かれている (2017年)



ニューメキシコ州インディアン・ブエプロ・カルチャルセンターで開催されたアート地図の巡回展「A:shiwi A:wan Ulohnanne: The Zuni World」 (ズニ博物館ホームページより転載)

してとり組んできたのが「協働カタログ制作」計画である。欧米や日本の博物館が収蔵するズニ関連資料を熟覧調査し、博物館が管理してきた情報やあらたな知見をデータベースに統合することで、地元での一元管理を目指すプロジェクトである。これは、モノと所有権の委譲というNAGPRA以降に見られる資料返還とは異なる、外部の博物館と先住民との関係構築に向けたあらたなとり組みとしても評価されている。

博物館活動の影響力

ズニ博物館 (ジム・イノーテ館長) はこれまでに、アメリカ人類学会の博物館人類学部門がその分野での革新的活動に授ける「マイケル・M・エイムズ賞」(二〇一〇年) と、国際学会組織の A T A L M (Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums) が管轄する「文化と生活様式の守護者賞」(二〇一三年) を受賞した。彼らの活動が学会から評価された理由は、「自分たちのための博物館活動」を掲げ、それを具体的に実施し、現代の米国先住民のこの種の活動を牽引しているからだだろう。そして特

に運営者や参加者にトライブ政府やトライブ博物館などの文化施設職員が多い A T A L M は、先住民に関する公文書、図書資料、物質文化や映像・音響資料を扱う研究者 (文化人類学、生物人類学、歴史学、法学、情報学、言語学、文化保存学など) と実務者との交流の場となっているため、受賞事実が他のトライブ博物館にさらなる影響を与えていくのである。

ズニ博物館は、ズニについての理解を深めようとするよそ者のための観光施設ではなく、ズニの人びとのための文化施設たることを謳う。そして伝統知を継承する地元の人びとや、考古遺物などの継承者のための情報収集と情報還元を優先し、例えば一部の特別な人しか知りえない宗教的知識や儀礼具が外部の博物館に収蔵されている場合に非公開依頼を出すなど、伝統知の継承や共有に関して生じかねない齟齬を最小限にとどめようと努力する。ズニ博物館が展開している展示される側だった人びとのプレゼンス強化や、土着の文化的文脈を尊重した資料情報管理というこれまでにない活動の在り方に、学界や実務者の注目が集まり、さらなる展開を見せようとしている。